
押入れパンダ2 「やっぱりいます」

西美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

押入れパンダ2 「やっぱりいます」

【Nコード】

N5785Z

【作者名】

西美

【あらすじ】

相変わらずパンダは居座っています。

好きな物はスイーツ。最近はパソコンを駆使してバイトもします。欲しい物ができたので節約に励むパンダ。

最近判明した事・わりと懸賞運のあるパンダです。

落ち込むと押入れに引きこもります。中身はオッサン臭いです。

「勇、帰りにスーパー寄ってほうれん草買ってこい」
「帰り？」

「あと見切りシールスタートは五時からだからな」
間違えるなよと念を押される。

カレンダーをペロリとめくり

「お前今日バイト休みだかな」
とスケジュール管理までされる。

言うだけ言つと背中を向けられた。
白い体に黒い手足がついてます。

そうです、まだいます。

居候のデカイ顔パンダがいるのです。

何やら最近、パソコンにハマっているらしい。
見るたびにピコピコと器用にツメで操作している。

「懸賞応募してんだよ」

だそうで、この前はなんだか知らないが
かじれるサトウキビって奴をGETしてた。

…そう俺の名前と、ここの住所で登録してた。

「何勝手に人の個人情報バラ撒いてるんだよ!!」
そう怒鳴るが、奴はいつものごとく

「んめーっ、これかじってみ？」

と自分がハムハムしていたボロボロのサトウキビを差し出す。
その齧るねぶる姿は、まさしく笹を喰うパンダで

俺は不覚にも和みそうに…

「なるわけねーよ!!馬鹿パンダ!!」

次は何当てようかな〜とパンダ調子に乗ってやがった。

あれから何かに目覚めたらしく人の家計にまで口出しする。

「お前が芸披露して稼げばいいじゃん」

と俺が告げた所

…無言で人のタンス漁って衣装を探しやがった。

「お前はどこの勇者だよ!!」

「コインの一つも入れとけよ勇」

マジで使えないと言われたが、それは俺のセリフだ。

家計簿をパソコンでつけているらしく

「ほれ、今日は牛乳安いから」

と、お前は俺の母親か嫁さんかと。

こんな毛深い嫁は嫌だ。

俺は少しめげそうになる。

俺が大学やらバイトやらに行っている間は

その姿のおかげで家庭内監禁状態だが

本人はパソコンで楽しんでいるらしく…ん？

これって間違いなく、引きこもりじゃね？

掃除機こそかけるようになったが

本当にそれだけで、洗濯物は

「俺のじゃねーし」

と拒絶。

そして飯は

「お前のがうまいし」

と拒絶。

なのに、ちゃっかり人の飯にケチつけるのは相変わらずだ。

バイトが終わって帰宅してパンダの餌付け。

そんな生活も2ヶ月目に入った。

まだ寒い今の季節にヒーターをつける。

「じじくせえプゲラ」

いや…お前毛皮着てるし…。

無視して温まっていると真横に座り込んでいきなり

「フアイヤ」

と屁をこきやがった。

あやうく毒ガスにて死亡する寸前で

必死で窓を開けた俺。

「この糞パンダ！！くせえんだよ！！」

「なんだと！！今度はデスかけてやろうか！！」

何こつそりネトゲにハマって用語に詳しくなってるんだ。

「勇にホイミ〜ベホイミ〜フライム〜」

最近、気づいたがコイツは案外無視すると静かになる。

なのでツツコミは入れずに、本気でム力つく時は適度にスルー推奨物件だ。

「へーい勇、俺欲しいのあんだぜえ」

ニコニコ笑ってにじりよるパンダ。

ああ、なんでこんなに可愛い生き物が、こんな邪悪に…。

「あれ欲しいんだよ…ええつとアレ」

固有名詞が出てこないらしい。見事なオッサンだ。

「アレだろうがソレだろうがシラン」

俺はとつと無視してパンダを押入れに押し込んで寝た。

朝起きるとパンダがいそいそと朝食を作っていた。

芸の細かい事に頭に俺のバンダナをつけて…。

それを首元につければ可愛いパンダだな。

しかし俺は警戒する。

何かある！！そう本能と、今までのコイツとの経験から理解していた。

家は許しても心は許さない。

睨みつける俺に愛想よくパンダが飯を差し出す。

「あ、勇はカフェオレだったよね」

温めるねと、いそいそとレンジで温める。

ワザとらしい…。

「はい、目玉焼きトースト。自信あるんだぜ」

ニコニコと正座して俺が喰うのを見てる。

パンダは自分は食べずに正座してる。

俺は以前に痛い目を見たので警戒しつつ喰う。

…確かにウマイ…。

パンダがモフモフと毛づくろいしてる。

黙って、もう少し小さいサイズだと確かに愛らしい。

だが俺は騙されない！！

「これ見てくれるか？これなんだよ」

「んー」

飯喰ってる俺に指差したパソコンモニタに映っていた商品。

ダイエット・パランスボール

あまりの衝撃で俺は啞えていたパンを落とす。

「はあ？」

「これ欲しい勇」

「お前馬鹿だろ？いいや馬鹿だ、馬鹿パンダだ」

「ちゃんと努力するから買ってくれよ」

「何を努力…」

「節約」

胸を張ってきつぱりと言い切ったパンダ。

「なら出てけ」

「オゝ勇。人類・皆兄弟イエス」

イエスイエスと首をブンブン振る。

いや…そんな兄弟いらないから。

「お前ムダ使い多すぎ、俺が本当の節約というものを教えてやる」
毛深い胸をボフツと叩く。

「だから任せろ！！全てはパランスボールのために！！」
「だからいらん！！」

俺のいう事など聞きやしない。

そうして家計をパンダが牛耳る事になってしまった。

次の日に宅配便が2つ届いていた。

一つは実家からの野菜と肉と缶詰。

もう一つは知らない会社名。

「俺のだコレ」

とパンダがバリバリと知らない会社のやつを開ける。

中から出てきたのは小型の機械だった。

「なんだそれ？」

「あーモニターしてんの？」

「はあ？モニター？」

「製品試して感想知らせるバイト」

世の中には色々とあるらしい。

だが、きっとパンダがモニターするのはここだけだ。

「勇が稼げって言った」

何気に俺に批判しつつ、なんでも箱は空気清浄機らしい。

「今、流行してんだぜ？小型のやつ」

とスイッチを入れる。

そして

「ストップ」

とソレに向かって屁をこいて

ヴアアアアアアアン！！！！

「おい断末魔あげてんぞ機械！！てかくせえって！！！！」

俺はもがきながら、必死で窓を開けた。

馬鹿パンダは腹抱えて笑い転げていた。

「ヒイヒイ！！ランプチカチカしてやんの！！ゲラゲラ」
機械壊れたんじゃないのかソレ。

実家から届いた野菜と肉をパンダは台所に運んだ。

「よっこいしょーイチ」

どこのオツサンだ。てか、なんだそのネタ。

見守っていると、包丁やらラップやら出して何か始めた。

「何してんだパンダ」

「んあ？保存するんだよ」

テキパキと切ってはラップに小分けに包む。

「へー素敵な奥さんみたいだな」

と俺が感心すると、さも自慢げに顔をゆがませ

「俺って役に立つたる勇」

とアピールするので反射的に

「いや」

「お前もバラバラにしてやろうか！！」

と包丁を向けて…おいおい！！作品が違う！！

これはコメディだ！！

「刃物持つてる相手に素手で向かってくんないや」

パンダに叱られた。

幾つか切らずに取って置いた野菜をビニール袋に詰め

「ほれ、お隣さんに渡してこい」

わーい、気が利くねーって、おい。俺の実家からだぞ。

だが俺は基本こいつと違って素直なので

渋々とお隣に渡してきた。

いつも怒った顔をしている隣のおばさんも笑顔で受け取ってくれた。

「よくお友達がくるのねえ」

なんて言われたので

「ええ…まあ…はは、ご迷惑かけます」

などと空笑いで誤魔化して。

部屋に戻ってバイトに行く準備をする。

「ん」

パンダが無言でコートを差し出して来た。

本当にお前は俺の嫁さん気取りかよ。

と思いつつも、俺も無言で受け取る。

「スイーツ忘れんなよ」

そこか。

現実逃避の為に、明日のおまんまの為に俺はバイトに行く。

最近は仕事も慣れてきて、同僚達とも話をするようになった。

今日のシフトの相方は女の子だ。

確か高校三年生の瑞穂ちゃん。

もちろんロマンスなどあるわけもなく、他愛もない話で仕事は進む。帰りにいつものように、廃棄を詰めた籠から欲しいものを選んでい

ると
「これ、おいしいですよ」

と瑞穂ちゃんにスイーツを差し出された。

「ありがとう」

と礼を言って持ち帰る袋に入れる。

ふと見ると瑞穂ちゃんの鞆のキーホルダーがパンダだった。

「パンダ好きなの？」

「今、流行してるんですよ？やさぐれパンダ」

なんだその嫌味なネーミングは…と思いつつ

あまり深く聞かなかった。脳が拒絶した。

帰宅すると待つてましたとばかりにパンダが

俺の手から袋を奪い取り、とっとと漁りだす。

うん、俺はスルーされた。

「お！！今日は入ってるじゃねーか！！カaramelかよ！！」

ご機嫌になられた様子。

やさぐれどころか強盗パンダだよ、こっちのがタチ悪いよ瑞穂ちゃん。

ガツガツとスイーツを喰い終えたパンダが

「飯は？」

「今お前何喰った？」

「グエフツ、しらね」

疲れた体に鞭うつて俺は飯を作る。

とりあえずごはんは仕掛けてくれていたらしい。

あとはオカズだ。

廃棄のおつまみのカラアゲをレンジで温めて

缶詰を開けて適当に油で炒めた。

「お前、本当に進歩ねーのな」

パンダが姑よろしく背後で観察して文句つける。

「嫌なら自分で作れパンダのくせに」

「お？お前差別すんの？耳元でハアハアすんぞ？」

「だから生温かい息ふきかけるなっ！！キモチワルイ！！」
とつとと食卓に並べる。

目の前の生物は正座してフォーク握ってニコニコしてる。

とりあえず俺と一匹は「いただきます」で無言で食べ始める。

なんというか、いい加減こういう状況に慣れてきた自分が悲しい。

「で？彼女とかできないわけ？」

パンダに唐突に俺の暗黒の部分を指摘された。

「お前：触れてはならぬ場所に…」

「メスの一匹や二匹捕まえてこいよ」

「メス言うな！！メスって！！」

「なんのための接客業？お前に足りないのは積極性だ」
「うるさい」

「あれだ瞬発力だ」

なんでパンダにレクチャーされなきゃいけないんだ。

「飛び掛れ！！その瞬間を見逃すな！！」

「お前、鮭かなんかと勘違いしてないか？」

「お前こそ俺の事をただの熊かなんかと勘違いしてね？」
とりあえずムシャムシャと飯を食べる。

「鮭とつてこいよ」

俺が言う。

「パンダに何求めてるんだよ」

パンダも逆らう。

「むしろお前はでてけ」

再び俺が言う。

「俺でてつても女できないのに変わらないけど？」

平気な顔で、おかわりまでしやがった。

「俺みたいな色男ならお前も良かったのにな」

「色男つて…ただの白黒だろうが」

俺もとりあえず、おかわりした。

こうして何も生み出さない無意味な会話は終了した。

パンダは負けず嫌いだった。

「白黒はつきりつける判断力がお前に必要だ。俺を見習え！！」

糞パンダ。

それから幾日かたった頃、また荷物が届いた。

たまたま俺はバイトが休みですぐに受け取った。

そして中身は

「やふー！きたきたー！！まってましたー！！」

俺は生まれて初めてパンダが小躍りするのを見た。

「これこれ！！これがいいのよ！！」

箱の周りを盆踊りよろしく踊ってまわるパンダ。

「こら、ドタバタすんなって！！」

「やふーやふー！！ひゃっはー！！」

いや…ひゃっはーは世紀末だからヤメテ。

開けると紫色の大きなビニールが入ってた。

「ほれ勇！！ファイツ！！男らしい所をみせてくれ！！」

どうやら膨らませるといっらしい。

確かにパンダには無理だろう。

俺は必死にフーフーと膨らませる。

てか苦しい。

パンダが横でいかにも、辛抱たまりませんと正座して
時折「ファイツ！！ファイツ！！元気デスカー」

と野次を飛ばしてくる。

いい気なものだ。

「いや、俺さ家にこもってるから運動不足じゃん」
ならパソコンすんな。

「これあつたら少しは気がまぎれるだろ？ちょー嬉しい！！」
はいはい、良かったな。

「お互い節約して、頑張ったかいあつたよな？」
ん？ちよつと待て。

「お互い頑張った節約ってお前：もしかして」

「おい休むな勇、愛を吹き込め」

「まてまてまてまて！！家計費から買ったのかコレ！！」
バキッ！！

いきなりパンダパンチを脳天に喰らった。

「黙って膨らませろよ勇」

フーフーと威嚇までされた。

こんな時に野生になつてんじゃねーよ！！

涙目で俺は必死に膨らませる。

そして、大きなボールが出来上がった。

絶対に叩き出してやると誓う俺の目の前で
さも楽しげにパンダがそれに乗っかる。

「ほよよーん楽しい。すっげえ楽しい」

ワキヤワキヤとボールに乗っかってバランスを取る。
そして今度はゴロリと転がり

「玉乗り〜ほほほーい」

とボールとジャレる姿は間違はなくサーカスだ。
パンダは興奮のあまり、ヨダレまで垂らして夢中になって遊ぶ。
見ているこっちが怒るのが馬鹿らしくなってきた。
恍惚として白目までむいてやがる。キモチワルイ…。

「おい勇もやろうぜ！！すっげえ楽しいぞ」
ハアハアと目を輝かせて俺を誘う。

いや、いいから。

飽きもせず延々とボールと遊ぶパンダ。

子供達の大人気間違いなしだ。

だが大人の俺は認めない。

人の気も知らず、ハフハフと遊び呆ける。

写真とつてネットにあげたら人気とれそうだと

人事のように観察していた俺。

すると突然

プシュウウウッ！！

何かが抜ける音がした。

パンダが硬直する。

そしてそのままゆっくりとボールは凹み…。

「…」

「こっちみんな」

パンダが悲しげに目で訴えてきやがった。

「爪でもたてたんだろ！！せっかく買つてすぐに破壊しやがって」

どうするんだ！！家計費から出したんだろ！！

と責める俺に、パンダはショックなのか無言だった。

あまりの凹みように俺は、それ以上責める事ができなかった。

完全にしぼんだビニールをつつむきながらキチンと畳むパンダ。

そして、畳んだソレを脇に抱えて、押入れに引きこもったきり

その日は出てこなかった。

次の日の朝。

俺は本当に、本当に少しだけパンダが気がかりだった。

奴は何事もなかったように台所に立っていた。

「おいパンダおはよう」

その声を後ろからかけたが無言だった。

おいおい、まるで俺がヒドイ奴みたいじゃないか。

そう罪悪感を感じていると食卓に朝食が並ぶ。

「で？これは？」

皿は一つ。モヤシ炒めが乗っかっている。

それだけ。

パンダが無言で小皿と箸を俺に渡す。

とりあえず素直に受け取る俺。

カチャカチャと器用に自分の小皿にフオークでもやしを取るパンダ。

とりあえず互いに顔も見ず無言で食べ始めた。

そして奴は言いやがった。

「また、がんばろうな」

「…おい、何を」

「二人で貧乏でも頑張れば2号もすぐ買えるって」

「まてまて、2号って、おい」

「俺、頑張るから、苦労かけるけどすまん」

「何言ってる、またボール買うのか？嫌だって勝手に決め…」

「俺めげないから、節約」

ニカツと笑うパンダ。

冗談ではない。

とどめにパンダが言った。

「今なら1つ買っと、もう1個ついてくるキャンペーンあるからさ」

「ふざけんなー！！！！」

立ち上がり、俺はとつと学校に向かうために靴を履く。

わざわざ見送りにパンダが来た。

「じゃ帰りは今日はスーパで大根安いから…」

「知るかボケ!!」

ドアをパタンと閉めて俺は出て行く。
いい加減にしろ。

本当に、早く出て行け!!

頭の中で憎たらしいパンダがボール遊びしている光景を思い出し
でも可愛かったなああのパンダ、大目に見てやるか…
などと思うはずもなく

俺は怒りで胸が一杯で学校に行くのだった。

(完)

（後書き）

続編という形ですが、相変わらずパンダは自分勝手です。
引きこもると押入れに入ってしまう。
とりあえず寒い日はパンダをモフモフしてしまいたいです。
でも中身はオッサン臭くて最悪です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5785z/>

押入れパンダ2 「やっぱりいます」

2011年12月19日11時56分発行